玉造中だより
楽し学舎（まなびや）
No. 17
R2・8・31

今日から　体育祭の練習開始！五日間で仕上げる

コロナに負けず，自分たちで考えて動き，新しい体育祭を！

いよいよ今週から五日の体育祭に向けての練習が始まりました。今年は新型コロナウィルスの感染拡大により、これまでのような体育祭ではなく、様々な制限がある中での体育祭となります。そういった制限がある中で何ができるかを考えることが求められます。決してこれまでのように「誰かがやってくれるだろう」という受け身の姿勢ではなく、「どうすればもっと良くなるか」を自分たちで考え、行動することがみなさん一人一人には求められます。

一日二時間の練習計画が大事になる

今年の体育祭の練習は臨時休校期間中にできなかった授業の時数の確保の関係で、練習時間もこれまでのようには取れず、一日二時間の練習計画になっています。昨年までのようにとれません。だから、何が大事になるかといえば、計画が大事になってきます。団長を中心とする三年生等が事前に十分に話合いをして、効率的な練習をしていく必要があります。

団の打ち合わせの様子

感染症と熱中症の予防対策を

今年の体育祭は九月実施ということで、感染症プラス熱中症との戦いにもなります。密集を避ける、手洗いはこれまで通り必要ですが、水分の補給、帽子の着用等、熱中症対策も必要になってきます。一人一人が意識して取り組んでください。

制限の中でも充実した体育祭にしよう！

「一生懸命だと知恵が出る。中途半端だと愚痴が出る。いい加減だと言い訳ばかり」という言葉があります。

このコロナ禍の中、本校だけに限らず、多くの学校が学校行事の開催に苦慮しています。多くの方の助言や支援をいただき、制限のある中ではありますが、二学期の行事を充実したものにしていきたいと考えています。

学級紹介

二年三組　森・樽井学級

級訓「笑顔開花」

新型コロナ感染拡大に伴う臨時休校期間中に暗くなった気持ちを少しでも明るくしたい、そしてみんなが新型コロナに負けることなく、いつも笑顔でいられる学級にしたいという気持ちから私たちの学級の級訓が決まりました。

三組はとてもまとまりの良い学級です。学級の話合いになると、全員が話合いに参加しバンバン意見が出てきます。誰一人シラーッとしている人はいません。また、常に学級内には笑いが絶えません。おもしろいことを言う人がたくさんいて、時々、笑いすぎて苦しくなるくらい笑顔がいっぱいです。勉強にも全力で取り組むことができ、最近行われた中間テストでは学級平均が学年トップになりました。

ただ時々、休み時間と授業の区別がなくなり騒がしくなってしまうときもあります。提出物も忘れてしまう人もいますが、そんな時はみんなで注意し合って、メリハリを付けるようにしています。

担任の先生は、明るくどんな相談にでも気軽に乗ってくれます。良く大声で笑っていて、先生を見ているだけで楽しくなります。欲を言えば、もうちょっと堅い話ばかりでなく、時にはギャグをとばして欲しいなと思います。

今年一年間でこの三組の生徒全員が一つになれるような学級にしていきたいと思います。

みなさんはどう思う？こうしたこともれなく考えて欲しい。

すれ違いざまに距離を取られる、看護師の白衣を洗ってくれる業者が見つからない、あおり運転や投石をされた…。新型コロナウイルスの蔓延により、感染者や医療従事者、長距離トラックの運転手などといった特定の人々への差別やいじめが深刻化しているようです。

鹿行地域でも感染者が発生し、身近に感染のリスクが迫っている中で、〝差別〟という間違った選択をすることで、自分自身を守ろうとする人がいることは、大変悲しいことです。

戦う相手は「人」ではなく、「コロナウィルス」です。今こそ「思いやりの心」をもって人と接していきたいものです。感染した人や症状のある人を責めるのではなく、思いやりの気持ちを持ち、感染した人が早く治るよう励まし、治って戻ってきたときには温かく迎えて欲しいと思います。もし、自分が感染したり症状があったりしたら、友だちにはどうしてほしいかということを考えて行動して欲しいと思います。

編集後記

「ちょっとした優しさ」

連日の残暑で少々バテ気味。人間どうしても身体が辛くなってくるとイライラしている。きっと今の時期、暑さと夏休みが短かったことで、生徒も教師も疲れが出てきて、普段だったら何気なく過ごせることでも、ちょっとした事でトラブルに発展する。でも、ちょっとした「こころの余裕」を持つことで予防することができる。

先日、朝のルーティーンワークになった花壇への水かけを登校時間とも重なり、水をかけながら朝のあいさつをするのが楽しい。その日もホースを長く伸ばし、花壇の奥の方で水をかけていた。ところが、ホースが途中で引っかかってしまい、それ以上伸びなくなってしまった。水をかけながら直そうとホースを動かしては見たがびくともしなかった。そのとき、自転車置き場から出てきた二年生の男子がさりげなくサッとホースの絡んでいるところを直してくれた。「ありがとう」と声をかけたが、彼は何事もなかったかのように、その場を去っていった。

これを読んでも多くの人はピンとこないかと思うが、ピンチに陥っていた私にはまさに神様の手のように思えた。苦しんでいるときに、ちょっとした手を差し伸べてもらえると、苦しんでいる人には、何よりもうれしい。きっと二年生の男子はそんなつもりではなかったかもしれないが、実はその「ちょっとした優しさ」が人を元気にさせていたのだ。

こんな時期だからこそ、みんなが「ちょっとした優しさ」を持つことで、きっと学校生活も変わってくるのだろう。

（文責：小野口　吉政）